

ちば里山・バイオマス・シンポジウム活動報告

2018年2月3日、勝浦にて「森は海の恋人 地域資源活用シンポジウム」が開催され、森・川・海のめぐみを活かして、漁業再生、里山・里海保全、観光振興をテーマに、勝浦市関係者、NPO法人、研究者、近隣地域の里山活動関係者など多数の参加がありました。活動報告として、登壇者のお話を簡単にまとめました。主催：ちば里山・バイオマス協議会 後援：勝浦市、千葉県漁業協同組合連合会

鈴木克己 | ちば里山・バイオマス協議会 幹事

猿田寿男 | 勝浦市長

来賓代表あいさつ



主催者 開会あいさつ

外房地域で盛んであったイセエビ、アワビなどの磯根漁業や沿岸小型船漁業など、大きな意味において衰退してきている現状がある。地域の問題を掘り起こし活性化につなげるための問題を考えていきたい。皆様からのご意見等も伺いながら、明日の地域活性を考えたい。



このシンポジウムで、田中克 京都大学教授から多くのことを学ばせていただきたい。先生が提唱されている「森里海連環学」は、山の恵みが海の恵みとなって漁業再生と環境保全につながるということだが、市民の皆様と一緒に地域の自然と産業を再生し、まちづくりを進めていきたい。

第1部 基調講演 | 田中克 NPO森と海は恋人 代表

森里海を結び心豊かに暮らせる未来を



地域から日本を変えようとの取り組みが行われている。基本的には人のりよう(人と人のつながり)に関するものが中心である。私は、琵琶湖の生き物たちの思いを代弁する形で、地域創生の前提としての自然資産の重要性を、森里海連環の視点より問題提起を行った。1989年に始まった社会運動「森は海の恋人」、2003年に提唱された森から海までの多様なつながりを解明して、崩した自然を再生することまでを目標に定めた総合学問「森里海連環学」、そしてその流れの上に環境省が2014年に本腰をいれて立ち上げた中長期「つなげよう、支えよう森里海プロジェクト」が繋がった。これからの10年がこれらの流れを本流にできるかどうかの極めて重要な時期であり。経済最優先の社会から心の豊かさとその前提として未来世代の幸せを最優先する社会に変革する時代であると問題提起した。心の豊かさは、私たち社会的存在にも深く関わり、人と人が多様なつながりながら地域社会の中で生きていくなかで醸成されるように思う。

多様なつながりを再生する時代の到来

物を大量に生産し大量に消費(それは大量廃棄を伴う)する物質文明を機軸にした近代社会が大転換を迎えている。これまでの目先の経済成長と明日の暮らしの利便性を求めることにより断ち切り続けてきた多様なつながりを再生する時代の到来だ。すべてのいのちの源である水はつながりと循環の象徴といえる。水が地球上に発生し、いのちが水の中で生まれ進化を繰り返し。人類と周りの多様な生き物が共に生きる地球生命体系が出来上がった。いのちのふるさと海と生きる未来を拓くことが求められる。大都会は様々な個別的な技術やその運用、それらのイノベーションを次々と生み出し続けることにより、延命を図るような存在だと見なすことができる。一方、地方は地域に根ざした固有の資産(自然遺産と文化遺産)をいかに多面的に活用し、その中身を次第に高めるといった総合力を土台にした存在だ。地方が何か目立って個別単発的なアドバルーンをあげても一時的な延命措置にしかなりえない。小さな取り組みを紡ぎながら、人と自然、人と人を紡ぎながら総合的な力を蓄えていくことこそ大事である。またいつかお会いしましょう。

第2部 パネルディスカッション モデレーター 鈴木克己 ちば里山・バイオマス協議会幹事

渡邊幸男 観光協会会長



昨年、社団法人化を行った、町の力をつけるのは観光はかせない。勝浦市の自然を味わってもらいたい。勝浦に来たら、伊勢エビやカツオを是非味わってもらいたい。近年の漁獲時期がずれたり漁業に問題があるなら何かしらお手伝いしたい。綺麗さを求めるだけではなく、自然の環境で過ごしやすい地域づくりをしていきたい。

渡邊幸治 新勝浦市漁協組合長



森から流れる贈り物は水産業の人間として見守って行きたい。地域基幹産業でもある家族経営型の漁業者の集まり。平成2年に7漁協が合併して作られた組合。現在の組合数は580名程。クロマグロの資源枯渇化により勝浦地域も操業自粛等も余儀なくする。地域水産業の更なる強化をする為、体験等も様々なことを取り組み地域の活性化に寄与していきたい。

石井春人 勝浦漁協組合長



人口が減り若者が減ってきている影響もありカツオ船も減少している。地元の漁業者も年々減ってきているが、嬉しいこととして勝浦市の都会に住んでいる方自分から漁師になりたいと漁業者になっている。漁師が減れば魚屋も減ってきている。日本全国の方に本物のカツオを食べてもらいたい。

田中克 京都大学名誉教授



気仙沼では、カツオの一本釣りが基本。カタクチイワシを餌としてカツオの一本釣りをしているが、森と川のつながりの賜物だ。便利さやお金等の価値観で解決しがちであるが、環境を考慮すると本物志向を失わないことだ。アサリの漁獲量が干潟が減少傾向だ。海外からアサリの稚貝をまいているが遺伝的な影響を起こしているのではないかと。

竹林征雄 NPO農都会議 理事

勝浦市の自然資本利用拡大を



バイオマスに焦点を当てると、身近にある生ゴミや糞尿から膨大なエネルギーがとれる。エネルギー源は海外ではなく身近にある。勝浦市の山林は、5,800haありエネルギー源として活用していないことは勿体ないことだ。この市にある山林資源を活用すれば大きな産業となり得る。産業になれば雇用も創出される。みんなで意識を変えていかなければならない。

小浪博英 (一社)国土政策研究会専務理事

海産資源を活かす



勝浦市は、海と魚と想っていたら山国だ。御宿から来るとトンネルが多い。森と海はあるが里がない。この山と海をどう活かすのか。行川アイランドの跡地をどう活用するのかが楽しみだ。7つの漁港を巡る為には、郊外に駐車場を作ってバス等で巡回出来る環境があるといい。千葉県海産資源をどう活かすのか。人口流入の分析をして、しっかり調べて伸ばしていけば人口も増えてくるのではないかと。